

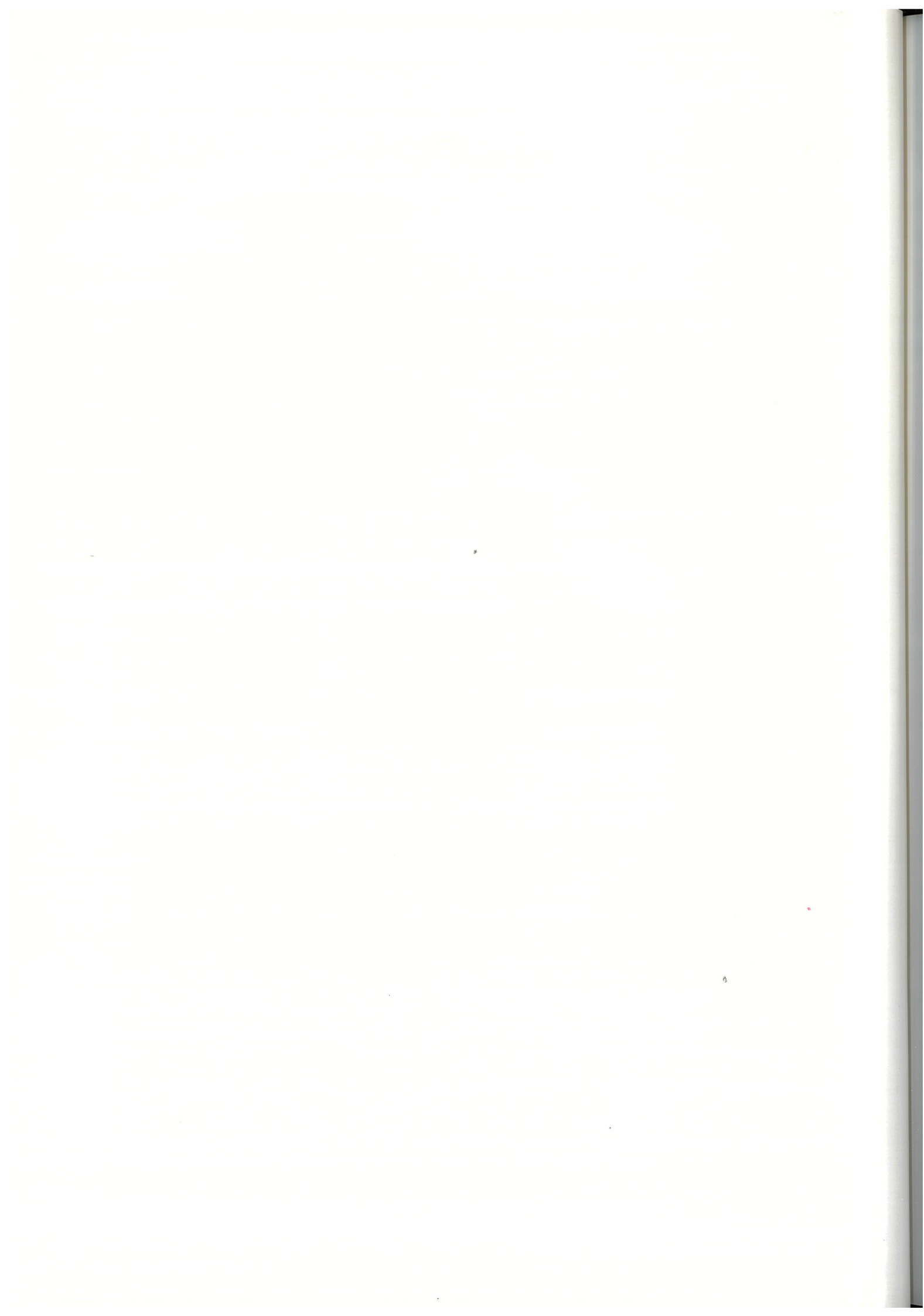
那珂川町の文化財XV

カクチガ浦遺跡群の発掘調査



平成12年度調査

2006年
那珂川町教育委員会



はじめに

カクチガ浦遺跡群は、弥生時代から鎌倉時代までの遺跡で、昭和56年から今日まで、合計6回の発掘調査が行われています。一部の内容については、「那珂川町の文化財Ⅳ」で皆さんに紹介をしましたが、今回、遺跡群のほとんどの発掘調査が終了し、内容がほぼ明らかになりました。そこで、この冊子で、遺跡全体を紹介することにしました。

皆さんが、この冊子をご覧になることにより、那珂川町の文化財をより身近に感じていただき、那珂川町の先人の遺産である、知恵や文化を知っていただくきっかけになれば幸いと考えています。

遺跡の場所

では、この遺跡は一体、どこにあるのでしょうか。下の写真を見ていただければ、おおよその場所が分かると思いますが、王塚台から松木までの、小高い丘の上にあります。今は、主要道路が通り大きな住宅街となっていますが、昔は、水場や田んぼに近く、それに見晴しが良いという、すばらしい環境であったようです。



航空写真（町北部より南方を望む）

各時代の遺跡

弥生時代

カクチガ浦遺跡群では、弥生時代の初め（約2400年前）の遺跡が最初に見つかりました。当時、人々はこの場所に集落を作り、生活を営んだようです。



竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）

家のあとです。地面を四角形または円形に掘り、なかに柱を建てて、まわりをカヤやワラでおおうものです。中央には「炉」という、火を燃やしたあとも見つかります。



貯蔵穴（ちょぞうけつ）

米や木の実などの食料をたくわえた、地下式の食料倉庫です。入り口は直径約2mの円形で、深さは3.5m以上のものもあります。すぐ下の平野部では、同じ時代の田んぼのあとも見つかります。

古墳時代（約1700～1400年前）

弥生時代の中ごろになると、人々は次なる安住の地を求め、ほかの場所へ移動しました。次に人々がこの地へ足をふみ入れたのは、約500年後の古墳時代になってからのことです。

人々は、この地を古墳時代の約300年ものあいだ、先祖をお祭りする墓地として選びました。那珂川町では、古墳時代のお墓が多く見つっていますが、古墳時代の初めから終わりまでお墓として利用された場所は、ここ以外には、ほとんどありません。

初めのころのお墓（約1700年前）

この時代に造られた代表のお墓を、「古墳」といいます。カクチガ浦遺跡群で、初めのころに造られたお墓は、すべて四角形をしています。尾根を削って形を整え、周りを溝で囲んで、お墓とほかの場所とを区別しています。その上には土を積み上げ（盛土）、形をよりはっきりさせるものが増えます。

1つの古墳に、2つ以上のお墓が多く造られるのも、この時期の特徴です。多分、家族のお墓として使われたのでしょう。普通は、1つのお墓には1人が納められますが、1つの古墳からは1つのお墓に4人が納められていました。

下の写真はエゲ古墳といい、このころのお墓では最も大きなものです。一辺は18mで、高さは4.5mあり、真横から見ると、3段になっています。頂上は平らで、中央には死者を納める施設として、「割竹形木棺（わりたけがたもっかん）」がおさめられ、なかからは鏡や玉、剣とともに、多くのふくそう品が見つかりました。お墓の大きさやふくそう品から、この一帯を治めていた人物のお墓と考えられます。



いろいろな種類のお墓

この時代には、さまざまな種類のお墓が造られます。ここでは、カクチガ浦遺跡群で見つかった、主なお墓を見ていきましょう。

割竹形木棺（わりたけがたもっかん）

竹を、たてに割ったような形をしています。お棺自体は腐って無くなっていますが、どれも、ていねいに粘土で包まれており、粘土のなかに詰まった土を取り除くことにより、本来の形を知ることができます。

箱式石棺（はこしきせっかん）

お棺の形に地面を掘りくぼめ、周囲を板状の石で囲みます。その上は石で蓋をし、さらに全体を粘土でていねいに包んでいます。死者を寝かせる床には、小さな石や粘土をしき詰めています。

木棺（もっかん）

箱式石棺と同じで、石の代わりに木の板を使っています。死者を寝かせる床には、玉砂利という小さく丸い石を、一面にしき詰めています。

石蓋土墳（いしぶたどこう）

地面に穴を掘り直接死者を寝かせ、その上に石の蓋をかぶせています。



割竹形木棺



箱式石棺



木棺



石蓋土墳

中ごろのお墓（約1600年前）

このころになると、古墳の形は四角形から円形に変化します。割石を積み上げた「石室」が使われ始め、人を埋そうするためのお墓の種類は、全国的に統一されていきます。これまでは、1つの古墳に1人が原則でしたが、このころになると、入り口を付けたお墓が造り始められ、何度も用いられるようになります。

下の写真は10号墳です。周囲はこわされていますが、このころの古墳としては最も大きなものです。形は円形で、直径は25mあります。盛土の高さは3mあり、横から見ると2段に造られ、古墳の土が流れたりこわれたりしないように、葺石（ふきいし）と呼ばれる平らな石でおおっています。また、古墳の上は平らで、ここからは馬や家の形をしたハニワが出土しています。



終りごろのお墓（約1500・1400年前）

お墓は、横穴式石室（よこあなしきせきしつ）が主流になります。横穴式石室とは、人を納める部屋に、羨道（せんどう）という入り口を作り、その外には墓道（ぼどう）という、村やほかの古墳とを結ぶ、素掘りの道をつけています。

また、このころになると、1つの場所に多くの古墳が造られるようになります。群集墳といわれ、古墳の大きさも前の時代と比べると小さくなっていきます。那珂川町では、この時代の古墳が500以上も見つかっています。



奈良・平安時代（約1300～800年前）

この時代になると、「氷室」(ひむろ)が造られます。氷室は氷を保存する施設で、溶け出た水を排出するための施設も付いています。日本的にも非常にめずらしい遺跡で、氷は、夏、鴻臚館や大宰府で、中国や韓国からのお客さんに、ふるまわれたのかも知れません。このほかには、木棺墓が2基見つかっています。



鎌倉時代（約800・700年前）

この時代になると、遺跡はほとんど見られなくなり、木棺墓が1基見つかっただけです。木棺墓からは、中国で作られた青磁というお椀が入れられていました。

おわりに

最後に、時代ごとに遺跡の整理をしてみましょう。

弥生時代では、初めのころの集落が見つかっています。町内では、この時代の集落はまだ見つかっておらず、当時の暮らしを知るうえで、非常に重要な遺跡です。

古墳時代では、始まりから終わりまでのお墓が見つかっています。このようにお墓の移り変わりを知ることができる遺跡は、ほかの地域をさがしてもほとんど例がなく、お墓の移り変わりを知るうえで貴重な遺跡といえます。

奈良・平安時代の主な遺構では、氷室が2基見つかっています。日本的にみても発掘調査が行われ、氷室と断定できる遺跡は、ほとんど報告されていません。

このように、カクチガ浦遺跡群は、那珂川町はもとより全国的に見ても重要な遺跡であり、今後、那珂川町の歴史を考えるうえで、なくてはならない遺跡であるといえます。

那珂川町の文化財XV
カクチガ浦遺跡群の発掘調査

平成18年3月31日

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64番地1

印刷：株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41



平成15年度調査